

各論『落合知美氏：動物園動物』



各論2番目はNPO法人市民ZOOネットワーク理事の落合知美さんより、動物園動物についてのお話がありました。

「市民ZOOネットワークは、動物園に興味があった大学院生や大学卒業生などが集まって2001年に設立された市民団体になります。その当時、各地にある施設が古くなり、いくつかの私立動物園は閉園し、動物園は本当に必要なのかという議論が起きていました。動物園が危機的状況にあった時代でしたので、動物園を応援する形で動物園に暮らす動物たちの福祉を改善していこうという目的で当団体は作られました。」

動物園とは？

「過去には、貴族が権力を誇示するために動物を飼うという時代がありました。現在の動物園といえば、みなさんすぐに色々思い浮かべることができるのではないかと思います。公立では、東京都恩賜上野動物園、井の頭自然文化園、多摩動物公園などがあり、市町村が保有する動物園は全国各地にあります。私立の動物園も同様で、関東圏には宇都宮動物園などがあります。」

動物園では、キリンやゾウなど陸上に暮らす動物だけでなく、水に住む生物も扱っています。

「東武動物公園や富士サファリパークなど、動物園という名前のついていないテーマパークやレジャーランドもあります。そのほかにも、マザー牧場などの観光牧場やふれあい動物園があります。ペットショップなどでも動物園という言葉が使われます。これらすべて動物園になります。」

日本にはイギリスの動物園免許法のような法律がないため、動物園と名乗る施設はいずれも動物園ということになるからだそうです。

「しかしこれでは動物園の範囲が広くなりすぎてしまうので、今回は公益社団法人日本動物園水族館協会に加盟している施設を動物園と定義してお話をしていきたいと思います。こちらの協会に加盟しているのは、動物園は91施設、水族館は60施設になります。」

日本動物園水族館協会では種の保存、教育・環境教育、調査・研究、レクリエーションの4つの役割を掲げて活動を行なっているそうです。

動物園動物とは？

人間はさまざまな目的で動物を利用しています。動物園動物、畜産動物、産業動物、実験動物、コンパニオンアニマルなど様々な種類の動物が様々な形で暮らしています。

「これら動物は、すべて人の社会の中で、人の手で、人のために飼育されています。そして“淘汰”と“選択”が行われています。なぜなら、飼育環境に適応しにくい個体は生き残ることができないからです。より飼育環境に適応しやすい個体が生き残っていきます。また、ミルクをよく出す個体、小型でかわいい個体、扱いやすい性質の個体など、人間の目的に合わせた個体が選択されることもあります。さらには、人から餌をもらう行動など、飼育する環境において長所となる特徴が強化されることもあります。」

一般的には動物を飼いならすことで淘汰や選択が行われますが、動物園の動物はそれとは異なる事情があります。

「動物園動物は飼いならされておらず、また、飼いならしません。飼いならされていないというのは、野生由来の個体が多く、飼育の歴史が浅いために特徴が固定されていないということになります。飼いならさないというのは、たとえばライオンを例に挙げますと、ライオンには飼い猫のような人懐っこさやかわいらしさが求められるわけではありません。本来の繊細さ、獰猛さといった生態的な特徴が非常に重要なため、いうならば、飼いならしてはいけないということになるのです。」

そのため、動物園動物は野生動物としての特徴が強く残されることになります。

「飼育の歴史が浅く、野生動物の特徴が強い動物園動物は飼育が難しいということも大きな特徴であり、一方で問題でもあります。」

飼育が難しいということにより実際に見られる問題には、次のような事柄が挙げられます。

「生息地から動物園まで移動するときや飼育を始めたとき、飼育をしていく間で死亡することがあります。生息地とは違う環境で飼育され、人からの感染などもあり短命だったりします。また、成長していく過程で、発育・発達の問題、繁殖行動ができないといった問題も出てきます。」

このような問題に対応しようにも、そもそも飼いならされている動物ではないため、病気や怪我を治療すること自体も難しいのだそうです。

「ほかにも、ホルモンレベルの異常や動かないことによる筋力の低下が見られたり、異常行動としては食べたものを吐き戻す、自分の毛を引っ張って抜いてしまう、目的もなく同じところを行ったり来たりして歩き回る常同行動があらわれることもあります。社会構造が悪くなり、ケンカばかりしてしまう状況も見受けられます。」

動物園動物が抱えるこのような問題に直面する中で、動物園にアニマルウェルフェアという考え方が取り入れら

れるようになっていきました。

動物園とアニマルウェルフェア

動物園に対する考えが変化し始めたのは、1960年代以降にフィールド研究が進み、野生動物に対する知識が増加したことなどがきっかけです。

「野生動物に対する知識が増えただけでなく、マスメディアの普及により一般の人々もそれらの情報を手に入れやすくなりました。さらには生活が豊かになり、実際に動物が生息している地域に行けるようにもなりました。そのような中で、動物園の環境や動物福祉についての関心が社会的に高まっていったのです。」

ここで参考映像として、イギリスのBBCが1994年に製作したテレビ番組“動物園は今”（45分4回シリーズ、NHKにて放送）の一部が流され、実際動物たちが見せる異常行動などの健康問題や動物園の飼育環境の問題についての解説がありました。

「イギリスでこの番組が作られた時、日本ではまだ環境エンリッチメントという言葉が使われていませんでした。現在では、日本の多くの動物園で環境エンリッチメントが実践されています。」

環境エンリッチメントとは、普段あまり聞きなれない言葉かもしれませんが、いったいどのようなことなのでしょうか。

「**環境エンリッチメント**とは、アニマルウェルフェアの立場から、飼育動物の精神面に配慮して、無機質で退屈な飼育環境に工夫を施すことです。ただ単に動物を飼育するのではなく、それぞれの動物の生活の質に着目し、どのように飼育したらいいかを考えていきます。動物がしあわせと感じる飼育環境は、動物種により異なります。」

たとえば群れ社会で生きる動物は仲間と一緒にいることが大切です。その一方で、他の生物種と出会う機会を作るなど、社会的な刺激も必要となります。

「雨風をしのいで安心できる場所を作る、獲物を捕まえる機会を作る、遊ぶおもちゃを与える、バラエティに富んだ食べ物を与える、樹上で生活する動物には高さのある空間を与える、走り回れるような広い場所、問題解決をする機会を与えるなど、さまざまな種類の環境エンリッチメントがあります。野生本来の行動や能力を出せるような刺激を色々与えて環境を豊かにすることができれば、動物をよりしあわせにできるのではないかと、ということです。」

1993年、世界的な会議として第1回国際環境エンリッチメント会議（**International Conference on Environmental Enrichment**）がアメリカで開催されました。その後、会議は2年に1回世界各地で開催されています。今年（2019年）は南米コロンビアのボゴタで開催され、2019年の第14回は**京都で開催される**予定です。

「日本においては、2001年から私たち市民ZOOネットワークが“**エンリッチメント大賞**”を開始しました。環境エンリッチメントを普及していくためには動物園の悪いところを挙げるのではなく、良いところをより推進していってもらおうという趣旨のもと、“良い飼育をしている動物園”を募集し、応募のあった動物園の中から大賞を選んで表彰をするというものです。」

設立当初に多くの賞を受賞した北海道の旭山動物園は、2004年以降の動物園ブームを引き起こすことになりました。

「旭山動物園には特に珍しい動物がいるわけではないのですが、動物たちの行動を豊かにする環境が作られているため、それぞれの動物の生き生きとした姿や魅力が大きく引き出されています。これがきっかけで、日本でも環境エンリッチメントが急速に広まり、各地の動物園でも環境エンリッチメントや動物園の再生計画などが進められることになりました。これからもアニマルウェルフェアへのさらなる関心を高め、環境エンリッチメントの実施がより促進されるよう活動していきたいと思っています。」